Create 春号

03/01/2015

おとな高校創作部

http://sousaku.iinaa.net/



no.003 Create 春号

目　次

目　次 1

イラスト こんそめ 2

小　説 そらを 3

小　説 しぐれ恋四記～冬の頁～ / 鈴神 小鳥 6

ゲーム制作企画　告知 26

フリートーク 27

後 書 き 30

表紙イラスト：半泣き

No.003 Create ―春号―

公開日　2015.03.01

３の倍数月に部誌発行中！

おとな高校　創作部

http://sousaku.iinaa.net/



共に白に融けてゆきたいと　そらを

——消えた王へ

貴方の側にいて、どれほどの時が経ったでしょうか。貴方の側にいて、どれほど後悔したでしょうか。

国を奪われ、家族を殺され、戦利品として連れてこられた私のぼろぼろの手を、貴方が優しく撫でていたのが、記憶に新しい。けれど懐かしい。

私はその撫でる手を振り払い、貴方を殺す勢いで噛み付いて、痛い痛いと情けなく泣いた貴方。こんな子どもに泣く王に、私は全てを奪われたのかと、自分の運の無さを嘆きました。

長いこと、ただのお飾りだった貴方。

近寄れば牙を向く私に、自分はただの王冠置き場だと言っていた貴方。その横顔がひどく悲しそうだったのをよく覚えています。

きらきらと光る王冠の置き場所だった貴方は、王様には相応しくない、優しい人だった。

貴方が退位に追い込まれたのは、私が来てまもなく。権力を欲しがった人間どもが、貴方を追い詰めた。心の弱い貴方を追い詰めるのは簡単で。貴方は毎日一人で泣いていた。

私はそんな貴方を元気づけたくなって、側に寄っていった。

言葉を話せない私にできたのは、傷つき、包帯を巻かれた手を見つめることだけ。

貴方はそんな私を見て、優しく笑っていた。

ねえ、貴方はそれでも頑張るというの？

そう聞いたことがある。

「僕は頑張らなきゃいけないんだ。たとえお飾りの王様でも、王様なんだから。民を守り、民に尽くす王でなければならない」

そう言って貴方は涙を拭いた。

貴方とやりとりをしたのは、その一回だけ。

そして貴方は王様ではなくなって。貴方は王冠置き場ですらないものになってしまった。

もう王様じゃないから、君も側にいなくていいよ、と、私を王宮から出してくれた貴方。でも私は貴方の側にいたくて、寂しそうに歩いていく貴方を追いかけた。

横に並んで歩き始めると、貴方はいつもの優しい顔を浮かべて。その顔がだんだんくしゃくしゃになっていって、あなたは私を抱きしめて泣き始めた。

その泣き声が悲しくて、私も一緒になって泣いた。

――他の何者でもない貴方へ

ねえ、雪が降っているわ。

そう語りかけても、貴方は答えなくなった。

城下町では雪だるまを作っている子どもがいたわ。

貴方は答えない。

寝てしまったの？

答えない。

私は貴方の眠るベッドに乗り、起こさないように丸くなった。

出会った時と変わらない、優しい顔。

私も何だか眠くなって、そっと目を閉じた。

私を呼ぶ、声を聴きながら。

おやすみなさい。私の、王様。

――側にいてくれた君へ

「……君だけだ……。ずっと、僕の側にいてくれたのは……」

僕の腕を枕にして寝ている彼女を見て、笑みが零れる。

「誰も彼も、僕から離れていってしまったのにね」

彼女は答えない。

「君が僕の一番だったよ。君が僕の王様だったんだ。君の王様が僕だったように」

そっと触れると、柔らかな毛並みが僕の手を包んだ。その体は、もう冷たかった。

「向こうでも……君といたいな……」

その願いが叶うといい。そう思いながら、僕もまた、目を閉じた。


鈴神小鳥
しぐれ恋四記

「しぐれ恋四記　春の頁」　鈴神小鳥

――空を見ていた。早朝の澄んだ空に、薄い雲が流れていく。そんなことをしているうちに、どれだけ時間が経ったんだろう。

ため息を一つ。もう春も近づいて、桜の花も蕾を付ける頃だというのに。まだまだ冷たい空気に、ほうっと白く浮かび上がる。

暖かい布団が恋しくなった時雨は、外の景色に背を向けた。考えるのは、やめた。

そうして一歩踏み出したとき。

ペシッ！

「……っ」

クリーンヒット。

大きな雪玉が時雨の頭にぶち当たった。触れると髪はぐっしょりと濡れていて、残っていた雪の欠片がパラパラと落ちてくる。

――敵はとうも時雨を殺すつもりでいるらしい。その証拠に、投げつけられた雪玉は固く、それはもう憎しみでガチガチに固められていた。

〝敵〟の正体には、検討がついている。

そして、こんな風に喧嘩を仕掛けてくる理由も。

時雨は一度呼吸を整えてから、背後を振り返った。

「お園ちゃん、……」

あらかた予想通り。雪玉を両手に握り締め立つ彼女が、時雨を睨みつけていて。しかし、どうも様子がおかしい。何故こんなに泣きそうな顔をしている？

「あの、どうした……」

「っ……しぐ……ば……うわぁあああああ」

ついにはタガが外れたように大粒の涙をぼろぼろと溢れさせるものだから、面食らってしまった。時雨は慌てて園の元に駆け寄った。

「朱里様が……朱里様がぁ……！」

ヒックヒックと肩を揺らす園。涙はそう簡単に止まりそうもない。一生懸命に涙を拭う手は真っ赤に腫れていて、見ていて痛々しかった。そっと彼女の肩をさすってやる。

「寒いから、とりあえず中に。ね？」

彼女を気遣ったつもりだったが、その手は思い切り振り払われてしまう。

園は時雨から顔を背けて、とぼとぼと時雨の家へ上がり込んでいった。

「……全くわけが分からん」

そう呟きながら、時雨もその後に続いた。

園が奇襲を仕掛けてきたのは2度目のこと。前回はこんな様子ではなかったが……。

未だに泣き止まないで部屋の隅で丸まっている園。薄着だった彼女に自分の羽織をかけてやったために、少しだけ肌寒い。なんたって外はまだ雪が降っているのだから。

「……」

部屋の隅と隅。大げさなほどに距離を開けて、2人は座っていた。少しでも近づこうものなら牙を向かれてしまいそうで、時雨はただ静かに待つ。

あの園がこれほどまでに取り乱すなんて、一体何があったというのか。

嫌な予感に胸がざわめく。

〝あの出来事〟からもう数カ月。何度か朱里には会ったが……もう会いにいくのを辞めた。明らかに変わった朱里の様子。これ以上嫌われるくらいなら、会えない方がました。

凪佐は――あれからすっかり姿を見せず行方知れず。謝ることも、話をすることもできていない。

（……それが、いい加減なことをした私への罰なのかもしれない）

そう考えて、力なく笑った。

時雨の生活はひどいものになっていた。もうどうにでもなれと、部屋に閉じこもってただ眠るばかり。最近は痣の痛みもなくなって

いたから、眠っていれば何も考えずにすむ。楽だった。別に、凪佐と朱里、二人に出会う前の生活に戻っただけ。

――そんな私だから、もう今更何を言われても驚きやしない。時雨は前を見据える。

「なにがあったか、聞かせてくれる？」

膝を抱えた園がびくりと反応する。彼女は俯いたまま。

やがて覚悟を決めたように、静かに口を開いた。

「朱里様が……お倒れになりました」

「……倒れた？」

一気に体から血の気が引いていくのが分かった。考えが甘かった。告げられた答えに胸を抉られるような気持ちになる。園は這うようにしてこちらに近づくと、時雨の着物を掴んで握り閉めた。そして顔を上げると、助けを求めるように時雨を見る。

「このままだと朱里様が、死んでしまうかもしれないの」

彼女の目から、一旦引いたと思った涙が溢れ出した。時雨は混乱して、言葉を失う。

最後に朱里と会ったときのことを思い出してみる。随分口数が少ないとは思ったが……

……まさか。

（嫌われたのではなく……体調が悪かったというのか？）

言われてみれば、少し顔色が悪かったような。でもまさか、そんな。

時雨は園の肩を力強く掴んだ。

「朱里が死ぬって……どういうことだ、ちゃんと説明してくれ」

「っ……」

園は心を落ち着けようと、呼吸を整える。

少しの間をおいて、彼女は続ける。

「朱里様は、今眠っておられます。もう十日ほどになるでしょうか。」

「――十日も？」

時雨は驚き目を見開く。園はなんとか落ち着きを取り戻したようで目を閉じていた。また何のきっかけ抑えが効かなくなるかも分からない危うい様子ではあったが、それでもはっきりと事実だけを述べる。

「はじめはただ、お休みになっているのだと。最近随分といろいろなことがありましたから、きっとお疲れなのだろうと思って……でも……」

「蛍様……朱里様の妹君と、同じなんです」

「――朱里の妹？」

園は答える代わりにこくりと小さく頷いてみせた。

「蛍様は謎の病にかかり、朱里様と同じように眠ったまま。三ヶ月と十二日後に、亡くなりました」

「……」

ただただ言葉を失う。

「いったい……それは何の病なんだ。どうにか、彼女を助ける方法は……」

私の声を遮るように、彼女は大きく叫ぶ。

「わかりません！　あんな症状、聞いたことも見たこともない」

まるで、吐き捨てるように。時雨は園の肩に触れていた両腕を力なく落とした。

「……」

どうすることもできない。そう、悟った。医学の知識なんてこれっぽっちもなければ。ましてやそんな正体不明の病のことなど。

時雨にできることなんて、せいぜい、神に祈ることくらいだろうか。〝どうか彼女を救ってください〟と――

「……私は、私には。好きになった女さえ守ることが出来ないのか」

時雨は自分の不甲斐なさに、力なく笑った。その言葉に園はびくりと肩を震わす。

「凪佐も朱里も……大事なものは全て失って」

そう言って項垂れた瞬間。

〝バッシーンッ！〟

大きく乾いた破裂音が部屋に響いた。

「ふっ、ふざけないでよッ！」

園の叫ぶ声が鼓膜に突き刺さる。

時雨は自らの左頬に手をやり、呆然と彼女を見上げる。左頬がジンジンと熱い。

「朱里様はまだ死んでなんかいない！　一人で頑張っているのに……勝手にあきらめないでっ！」

園は怒りをあらわにして、時雨を睨む。必死に歯を食いしばって、震えていた。それでも瞳からは、また一筋の涙が流れる。

時雨もつられて泣いてしまいそうになって、唇を噛んだ。

（どうすればいいかなんて分からない）

自分は驚く程に無力で、不甲斐ない。それでも何もせずに、諦めるわけにはいかないと。目の前の彼女を見て、そう思った。

「――考えよう、朱里が助かる方法を」

そう口に出しながら、必ず救ってみせると、決意を固めた。園が自分の拳をきゅっと握り閉めた。

――しばらくの沈黙。彼女は、考え込むように俯いていた。そして、何かを言うのを躊躇うように結んでいた口が、静かに開かれる。

「……実は、一つだけ。心当たりがあるの」

ボツリ、ボツリと。かろうじて聞き取れるような小さな声で。

「心当たり？」

園は頷く。

「朱里様の妹。蛍様には旦那様がいらっしゃったわ。あなたとお顔がそっくりの、ね」

訳が分からずに、時雨は顔をしかめる。

「一年　遥（ひとせ　はるか）……それが彼の名前」

（！？）

彼女の口から発せられたのは、思いがけぬ名前。目を見開く。

「一年……遥……」

時雨は確かめるように、ゆっくりとその名を口にした。

――それは、顔も知らない兄の名前。幼い頃に生き別れたきりの、唯一の肉親。

「ちなみに……彼は、朱里様の元許嫁。これが、どういうことか分かる？」

園は悲しそうな目で、口元に笑みをつくる。

彼女の言った言葉は、ぼんやりと輪郭の無い状態で時雨の中に入ってくる。今の時雨には意味ははっきりと理解は出来なかったが、もやもやしたものが心に広がっていくのを感じて――それでも首を小さく横に振った。

「今は……今はそんなことどうでもいい。彼女を助けるのが先決だ」

そのもやを振り払うように、口にする。

「……そうね」

園が俯きがちに微笑んで、ため息を付いた。

「遥様は、蛍様がご病気になられて直ぐに姿を消したわ。〝彼女を救う方法を探しに行く〟……そう言って」

彼女は自分の膝に爪を立てる。悔しそうに眉を寄せて。

「でも――彼は戻ってこなかった。蛍様が亡くなった時も、そのあとも。二度と顔も見せることはなかった」

「……」

「あんな奴に頼りたくなんかない、でも。もしかしたら――」

「彼……私の兄が何か知っているかもしれない、と」

「……ええ」

時雨は腕を組んで、天井を見上げた。一年遥。いくら血のつながりがあると言えど、その男が、どこで何をしているのか――分かるはずもない。

今の今まで、生きているのかどうかすら、知らなかった男だ。

（どうする、私はどうすればいい？　でたらめに歩き回ったところで、見つかるとは思えない。無駄に時間を浪費することは避けたいが……）

時雨が目をつぶり思考を巡らしていた、その時。

ギシッ……

部屋に響いた古い床の軋む音に、時雨と園はビクリと体を震わせた。差し込んだ夕日が照らし出すシルエット。そして、次の瞬間二人は、瞳にうつったその人物に目を疑った。

「……よぉ、シケたツラしてやがるな」

寒い部屋に明るい声が響く。

「凪佐……なんで……」

――あの空と同じ色の明るい髪に、褐色の肌。忘れるはずもない。柱にもたれかかる、懐かしい友人の姿に視界が歪んでいく。

「お前……泣くなよ。男だろうが」

呆れたように笑う凪佐。本当に今日は情けなく泣いてばかりだ。

――彼に言いたいことは、山ほどあった。でも、時雨が口を開く前に、隣から耳が痛くなるような声で彼女が叫んだ。

「オレンジ頭！　今までどこ行って……」

言いたいことがたくさんあったのは、園も同じだったようで。彼女は瞳を潤ませ彼のそばへ寄る。

「なに？　俺がいなくてそんなに寂しかった？」

凪佐がふざけた調子で言うと、園は近くにあった湯呑を彼に投げつけた。

それは鈍い音を立て、凪佐に当たる。

「ってぇッ！　……お園ちゃん、それマジでシャレにならないから！」

何もかもが懐かしい光景で、気づけば時雨は笑っていた。たぶん、二人も同じように感じているのだろう。空気が、一気に暖かいものに包まれる。

このまましばらく笑っていたい――でも今がそんな状況でないことは誰もが理解していた。

凪佐は一息をついて。

「……さて、本題だが」

そう切り出した彼を、時雨と園は見つめる。

「お前らが話していたのは……朱里ちゃんの病気のこと。そうだな？」

時雨ら二人は、神妙な面持ちで頷いた。

どうやら凪佐は全て話を把握しているようだった。……おそらく彼は、何かしらのき

っかけで朱里のことを知り、ここ時雨元へ訪れる決意をしたのだろう。

「さっき二人が話していた件だが――俺が力になれるかもしれない」

「……どういうことだ？」

さっきの話というのは、兄のことだろうか。

時雨は首をかしげる。

「自慢じゃ無いが、俺は顔が広いんだわ。一年遥という男にも、心当たりがある」

凪佐はふっと、口元に笑みを浮かべた。

「なんだって！」

「本当なの！？」

時雨と園は二人して凪佐に掴みかかる。その勢いでバランスを崩した凪佐の体がぐらりと揺れる。

「うおっ……とまあ、とりあえずだな。お前ら色々と拭け」

彼は苦笑いで手ぬぐいを差し出した。

＊　＊　＊

「なぁ、凪佐」

「……ん？」

時雨の部屋、男二人肩を並べる。辺りはすっかり暗くなり、園は朱里が心配だからと帰

っていった。明日、凪佐と二人で朱里の様子を見に行こうと思う。夜が明けるまで、凪佐とこの家で二人きりだった。

久しぶりの会話に、僅かに緊張が漂う。

「あのさ、」

時雨は、そう切り出す。話すのはもちろん〝あのこと〟だ。

「あー」

凪佐は何かを察知したように苦い顔をする。

……彼としては、今更掘り返すことは望んでいないのかもしれない。でも、けじめだ。このままなあなあにはしたくなかった。

「朱里のこと……本当に悪かった。お前の気持ちを知っていて、私は……」

「っあだぁあぁ！」

時雨の言葉を遮るようにして、凪佐が叫ぶ。時雨は驚いて彼を見た。彼は恥ずかしそうに頭を抱える。

「いいんだよ、もう。そんなことは」

凪佐はそういって、その場にうずくまった。そして、小さなため息。

――少しの間のあと、彼は口を開く。

「……なぁ、覚えてるか？　俺たちが出会った時のこと」

「出会ったとき？」

凪佐に言われて、時雨は首を捻る。

凪佐との出会い……そんなに古い話ではない。たかが数年前のことだ。

「お前、ひどい有様だったな。部屋から出ずに、死んだ魚みたいな目ぇしてさ」

彼の話を聞きながら、時雨も記憶を遡っていく。凪佐は当時を思い出したのか、クスクスと笑うから、少しだけ恥ずかしくなった。

（……もう随分と、昔のことのようだな）

時雨もまた、その時のことを思い出していた。

そのころの時雨は、というと。何にも興味がわかず、頭も常に朦朧としていて。

日に日に無くなっていく体力と、気力。何をきっかけにそうなったのかはもう忘れてしまったが……。生きているとも、死んでいるとも言えない、そんな毎日。永遠の時間。

――そこに現れたのが、凪佐だった。

「……懐かしいな。最初から遠慮の無い男だった」

この男はひとの生活スペースにずかずかと入り込んできて、あっという間に時雨のペースを崩していった。

「春は花見だ、夏は祭りだと……一年中連れ回したからな」

「無理やりにね」

それを聞いて、凪佐は可笑しそうに鼻の下を掻いた。そして話を続ける。

「興味があったんだよ、お前のこと。いっつも辛そうな顔してさ」

「こいつは笑わねぇのかとか、好きな食べ物はあるのか……とか」

凪佐は思い出しているように、遠くを見つめていた。その瞳はとても優しくて。

「色々考えてるうちに、思ったんだ。〝俺が意地でも笑わせてやろう〟って」

――そうして凪佐、いつものようにニッと笑ってみせる。時雨は驚いて、その笑顔を見つめ返した。

「……なんの嫌がらせだろうかと思ってた」

時雨の一言に、凪佐は思い切り吹き出す。

「ひっでぇ！」

そして二人で声を揃えて笑った。頬が痛くなるほど、長い時間。

「お前、ほんとによく笑うようになったよ」

凪佐は小さく息をつく。

「朱里ちゃんのことも……親友としては喜ぶべきことなんだ」

凪佐は、足静かに組み替える。外はもう日が暮れてしまって、暗くなっていた。

「どういうことだ？」

時雨は彼の隣に座ると、そう尋ねる。

「……」

ガッ！

凪佐に勢いよく叩かれた背中、時雨は驚いて姿勢を逸らす。

「あの時雨が人を好きになったんだから、これ以上嬉しいことはねーよ」

彼は冗談っぽく笑い飛ばす。時雨は顔が暑くなるのを感じて、ごまかそうと下を向いた。

「まあ、まっ先に俺に報告しなかったことは、処罰に値するが……お似合いだよ、お前ら」

「……」

時雨はぎこちなく笑うしかなかった。

園の言っていた話が、ふと頭をよぎったのだ。彼女の許嫁だったという……私の兄の話。

でも、今彼に話すことは出来なかった。

いや、〝彼に〟というより、時雨自身が口にすることを拒んでいたのかもしれない。

「……ありがとう、凪佐」

時雨はそれだけ呟くと、凪佐もう一度、ぽんと肩を叩く。

「――絶対助けようぜ、朱里ちゃんを」

「……ああ」

時雨は静かに頷いた。

＊　＊　＊

翌朝

コンコン、と。時雨は控えめに戸を叩いた。ゆっくりと開いた木戸の隙間から園が顔を覗かせる。

「……こっちです」

時雨と凪佐は園の後ろに続いて歩く。とくんとくんと、胸がなった。眠っているとは言え、愛する人との久々の再会である。

園はある部屋の前で立ち止まる。時雨に〝ここだ〟と、視線で合図を送った。

「……朱里、時雨です。入りますよ」

返ってくるはずの無い返事を待たずに、時雨はゆっくりと麩をひらいた。目を開く。

布団の中で横たわる朱里は、いつも以上に白く冷たく映った。

時雨は彼女のそばまで行って跪くと、彼女の手をそっと握り閉めた。

「必ず、助けます」

小さい声で、でも力強く呟く。凪佐と園が、後ろから見守ってくれているのを感じながら。

「俺と時雨はこのまま、遥さんを探しに行く。……お園ちゃんは、どうする？」

凪佐がそう、口を開いた。園は少し俯いて眉を寄せた。

「待っているだけなんて嫌……。それに、彼の顔を知っているのは私だけだもの」

でもそこまで言って、未だ眠り続ける主の方へと視線を向ける。

「でも、朱里様を一人で置いていくなんてできない」

時雨と凪佐は、首を縦に振った。

「お園ちゃんはここにいて、朱里についてやって欲しい」

時雨は辛そうな彼女にそう告げる。

「――まぁ、俺がいてやってもいいけど……朱里ちゃんと二人っきりで♪」

凪佐がにやけた顔で笑うと、その背中に園の蹴りが見事に命中する。凪佐はその場に崩れ落ちた。

「早くあの男を連れて来なさい。私、待つのは嫌いなの」

園は、そう言って笑ってみせた。

＊　＊　＊

「――時雨、見ろよ」

「ん？」

道中、凪佐の指差す方を見て立ち止まる。

「桜、か……」

まだ雪も残る中、桜の花が開き始めていた。

それはとても不思議で、幻想的な景色。

ドクン……

（！　……なんで急に）

時雨は咄嗟に首を抑えた。忘れていたあの痛み。思わず顔を歪める。

「どうした？」

不思議そうにこちらを見る凪佐に、なんでもないと首を振って、呼吸を整える。

二人の背後から近づく影があった。

「もし、お兄様方。どうかなされたか」

こんなときになんだ、と煩わしく思いながら、時雨は後ろを振り返る。

「そんな鬼のような形相でいては、眉間にシワが……ん？」

男だ。口から下を隠したその男は、不思議そうにこちらを見る。

――そして、一言。

「ああ、あなた。憑いてますよ」

彼は、笑顔でそう言った。

夏号へ続く

フリーゲーム制作企画

ジャンル：ホラーADV
2015年夏　公開予定
登場人物　続々追加！



企画用サイト
https://sosakugame.wordpress.com/



適当な絵ですいません



こんにちは。
今回も何とか提出まで漕ぎ着けました....。

もっと描くスピードを上げて、
影とかも丁寧に描かねば。
色んな絵を描いてもっとうまくなります!!

でもまずはゲーム作りを頑張ります。

こんそめ

そらをのフリートークヽ(=´▽`=)ノ

ホモにすると言ったな。あれは嘘だ。すいません思いつかなかっただけです orz
ついでに今回のフリートークも絵なしです。何故かデジタルじゃ描けなくなりました！前にもこんなことあったから、そのうち描けるようになるって信じてる……！

最近はホントホモばっかりの生活を送っています。いやリアルの知り合いは別にホモじゃないんですけど！一組くらいいいろよな！
買う本はホモばかり……あ、ちゃんと普通の本も買ってますよ？
つまり何が言いたいかというとホモ楽しいです。最近すごく楽しいので、此の勢いのまま何か書きたいんですが、如何せん私のキャラにホモが少ない！　非常に少ない！元々がノーマル好きなのでしょうがないですね……。

次回は……まったく何書くか決まってないのです……。
今回が暗めだったから次は明るめと思うんですが、明るい話って得意じゃないんですよね！次回までのんびり考えます！ではでは！

FREE TALK

フリートーク

どうも！鈴神です(´・ω・`)
原稿、間に合ったーヨカッター
しぐ恋、相変わらずページ数
とって申し訳ないなーと。
（↑反省してない）

後書きにも書くと思いますが
実はひっそりとゲーム制作企画
スタートしてます！
創作部サイトにゲーム企画のリンク
を作ってますので、
そちらもぜひよろしくです！



Suzu kami

春号　後書き

あっという間にもう春号ですね。お久しぶりです。
今回少しボリューム控えめになっていますが、いかがでしたか。
現在、部誌制作の他にフリーゲームの制作企画も動き出してます！
サイトの方で少しずつ情報を公開していきますのでお楽しみに
ヽ(・∀・)ノ

またもう少ししたら新入部員さんも募集したいなと思ってますので、
入部希望の方は創作部サイトよりメールお待ちしています
（連絡アリの方優先します）

では、次はまた暖かくなったころに！アディオス！
部長　鈴神　小鳥

[次回の部誌発行]
Create　夏号：6月1日　公開

おとな高校　創作部

創作活動を愛するおとなのための部活動です。
イラスト・小説・漫画・詩・音楽など、表現方法は問いません。
年 4 回の部誌発行を中心に、ゆったりまったり活動中。

詳しくは HP をご覧下さい
http://sousaku.iinaa.net/

部員(10名)
[鈴神 小鳥 / けーすけ / 菜菜 / こんそめ / そらを
神名 雨 / kani / 半泣き / ぱしりすく/白理]

Create 春号

03/01/2015

おとな高校創作部

http://sousaku.iinaa.net/



no.003 Create　春号　2015.03.01 公開